

文学・メディア・思想戦： 〈従軍ペン部隊〉の歴史的意義

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 五味渚, 典嗣 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5864

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



文学・メディア・思想戦

——〈従軍ペン部隊〉の歴史的意義——

五味 渕 典 嗣

1 はじめに

一九三八年八月二四日付新聞各紙で一斉に報じられたいわゆる〈従軍ペン部隊〉計画をめぐっては、これまで高崎隆治や櫻本富雄らによって、主に文学者の戦争協力という観点から論じられてきた。^① こうした立場からの検討に対し、近年は、個別的なテキストの様相に着目した議論も登場している。荒井とみ代は、「ペンしか持っていない作家が、そのペンで何をわたしたちに残しているか、そこから何を学ぶことが出来るかを考えたい」として、〈従軍ペン部隊〉参加者の記述を概観し、日本帝国の対中国政策に率直な不安を書き付けずにはおれなかった岸田国土の誠実さと「痛ましき」^②について述べている。田中勳儀は、丹羽文雄に即して〈従軍ペン部隊〉の足取りを整理しつつ、『還らぬ中隊』（『中央公論』一九三九・一）を書いた丹羽が、他の参加者たちとは異なって「あえてドキュメント的な方法を排し、本格的な小説をめざした」ことを評価する。^③ 久米依子は、吉屋信子の戦争報告文の言説が、総力戦体制下で〈女性作家〉に期待される役割を折り込む一方で、透明で一義的な意味に還元できない余白を抱えているさまをあとづけている。^④ 飯田祐子は、〈従軍ペン部隊〉で

華々しく活躍し、「兵隊さん」たちへの熱い思いをあられもなく書きとめた林芙美子のテキストにも、従軍記にかかわる期待の地平を逸脱しかねない不穏な過剰さが存在することを指摘している⁵⁾。

確かに、高崎や櫻本の綿密な調査は、現在の読者に多くのことがらを教えてくれる。また、テキストはその定義上多元的で複数的なものだから、どれほどコロナルな欲望が充満していたとしても、個々の従軍記の差異と固有性を無視するのは「被植民者として他者を一枚岩に塗り込める、コロナルな語り方と読み方」と違わないではないかという飯田の指摘は拳々服膺するに足るものだ⁶⁾。だが、総じてこれらの議論は、〈従軍ペン部隊〉を、一九三〇年代から四〇年代にかけての文学・文化と政治との関係を物語る一挿話と捉え、その前提のもとで、それぞれの書き手の対応やテキストについて論じたものである。すなわち、日本帝国と中華民国との武力衝突が本格化して以後、なぜ一九三八年八月下旬の時点で公権力による文学者の戦地派遣が検討・実施されたのかという、最も基本的な問いが問われていないのである。

加えて、文学者の戦争協力を問う構えそれ自体が含む問題性にも留意しておきたい。もとより、個々の書き手の言動や行動は何度でも検証されてしかるべきだろう。しかし、戦時体制期の文学者・文化人の戦争協力（と抵抗）のみを取り出すことは、複雑にも多様にもなっていたこの時期の権力やメディアとの交渉という局面を看過してしまう可能性がある。また、文学者の個人的な責任のみを問題にする姿勢は、ジャンルとしての〈文学〉それ自体を、無垢で非政治的な言説領域として免責することにもなりかねない。

しかし、ここで考えておくべきは、とりわけ『生きてゐる兵隊』事件・『麦と兵隊』登場以後、〈文学〉は、戦争遂行権力にとっての思想戦・宣伝戦の一翼を担うプロバガンダとしての機能を期待され、現実にも担ってしまっていた事実である。その点で、林芙美子の名高い〈漢口一番乗り〉は、戦争報道を大きなビジネス・チャンスと見た朝日新聞社が「共同制作したメディア・イベント」だったことを明らかにした佐藤卓己⁷⁾や、武漢を「東方のマドリッド」と呼ぶことで、国際的な反ファシズム運動の潮流に棹さそうとした中国側の宣伝戦略との対抗関係を視野に入れるべきとする蒲豊彦の議論⁸⁾はたい

そう有益である。ただ、この二者の議論にしても、このときの日本帝国が具体的にはいかなる報道宣伝戦略を企て、文学者や文化人に何を期待したかという検討は十分とは言えない。

以上の問題意識にもとづき、本稿では、軍や情報当局の内部資料も参照しながら、〈従軍ペン部隊〉計画の背景と狙いについて検証する。その上で、実際の〈従軍ペン部隊〉参加者をふくめ、この計画に対する反応・反響の言説を確認する。一般に戦時体制期の問題を検討する際には、新聞や雑誌メディアに掲げられた言表の内容的な分析だけではなく、言説の場そのものに介入・干渉する力の作用や、そうした力との交渉の様相を考慮する必要がある。そこでわたしは、語られた言説のレベルと言説を管理統制する側の問題意識・問題構成の双方を検討することで、戦争を生きた文学言説の担い手たちがどんな役割を引き受けようとし、実際のところ何を言ったり行ったりしてしまっただのか、同時代のコンテクストに即して考えてみようと思う。

なお、この時期〈ペン部隊〉という用語は、とくに新聞紙上では、従軍する文学者・文化人・新聞記者一般を指す言葉として普通名詞的に使われる場合もあった。だが本稿では、同時代に与えた文化的・社会的なインパクトを重視する観点から、一九三八年九月に中国に向かった菊池寛・久米正雄らの文学者グループを中心的に取り上げることとする。

2 武漢作戦の宣伝戦略

日本軍が一九三八年秋に実施を予定していた武漢・広東両作戦は、重慶に遷都していた蒋介石国民政府に物心両面で決定的な打撃を与え、戦争終結の契機とすべく立案されたものである。とくに、上海陥落・南京撤退後の国民政府にとって実質的な政治・経済・文化の中心だった漢口を含む武漢三鎮の攻略は、陸軍だけで一二箇師団、海軍と合わせると三五万人余の兵力が動員される、中国との本格的な開戦以来最大の軍事行動となった。

（従軍ペン部隊）が、この武漢作戦に合わせて企画されたことはよく知られている。よって、その背景と狙いを考えるためには、作戦行動の開始に先立って、中支那派遣軍參謀長河邊正三名で決定・発令された中支派遣軍命令「伊作戦二伴フ宣伝計画」（一九三八・八・三）を見ておく必要がある⁹⁾。

後の記述ともかかわるので、少していねいに確認しておこう。「主トシテ蔣政権並其統制下ノ支那及第三国ヲ主ナル対象トシテ攻勢的ニ実施」するとされたこの計画は、公然情報にもとづく「一般宣伝」と、いわゆる（ブラック・プロパガンダ）にあたる「謀略宣伝」とに大別される。「一般宣伝」は、さらに「対支宣伝」「対外宣伝」「対内宣伝」とに区分される。「対支宣伝」では、「支那軍民ノ抗日意志ヲ喪失セシメ且政略並ニ謀略ト相俟チ漢口政權ノ崩壊ヲ誘致促進」するため、日本軍の宣撫・救恤の状況を周知させること、「対外宣伝」では、上海を拠点に「外人記者」の「掌握」に努めること、「好機ニ投ジ外人記者ヲ戰場ニ誘導シ戦況ノ真相ヲ把握」させるべきことが謳われた。「対内宣伝」の項では、「国民ニ対シ志氣ヲ鼓舞シ希望ヲ与フルモ本作戦ヲ以テ事変ガ終結スルカノ如キ印象ヲ与フルヲ避ケ、長期戦ノ決意ヲ益々鞏固ナラシムベキ報道」を展開すること、「皇軍ノ勇戦奮闘ノ状況、戰場ニ於ケル將兵ノ労苦等ハ成ルベク速ニ且ツ詳細ニ報道シテ、国民ノ奮起緊張ヲ促ス」旨が述べられている。こうした活動と並行しつつ、「謀略宣伝」では、蒋介石の下野を含めた国民政府の弱体化・内部崩壊を目的とした各種の工作を行うともされた。

以上のような方針が、武漢作戦の目的と一体であることは自明である。だが、そもそも作戦実施に先だって、こうした詳細な宣伝計画が策定されること自体、上海戦・南京戦の経験にもとづくものと言える（外国人記者「掌握」の必要を述べた点など、あきらかに南京戦報道を意識したものでろう）。この当時、中国大陆の日本軍は地域ごとに関東軍・北支那方面軍・中支那派遣軍として編制されていたが、一九三八年五月の徐州作戦は北支那方面軍を主力とするものだったから、中支軍にとって武漢作戦は、南京事件で蒙った汚名をそぐ最大の好機でもあったわけだ。情報宣伝という観点からしても、東アジア最大のメディア・センターである上海での報道戦に直面、いくつかの手痛い失敗のあと、徐州作戦を機によ

うやく態勢を整えつつあった中支軍報道部にとって、これまでの学習の成果を試す格好の機会と意識されたことは想像に難くない。

そのことは、大妻女子大学図書館が所蔵するパンフレット『従軍記者ノ葉』（請求記号T7822C61『中支派遣軍報道部映画関係調査資料』内。以下、『葉』と略す）の内容を見れば明らかである。A5サイズ全四三ページ、表紙に「秘」の文字が印刷されたこの小冊子は、一九三八年八月十三日という日付から、武漢作戦時の戦争報道・報道統制の指針を提示し、徹底させる目的で作られたものと考えて間違いない。目次を繰ると、「第一 従軍記者ニ対スル希望」「第二 新聞記事取締要領」「第三 従軍記者心得」「第四 新聞掲載事項許可判定要領」「第五 戦死者氏名新聞掲載ニ関スル件」「第六 陸軍省令第二十四号ニ基ク「陸軍省許可済」ノ意義ニ関スル件」という六つの節に加え、「附録」として、中支軍報道部馬淵逸雄中佐によるラジオ演説「報道戦線ニ立ツ従軍記者ノ活動」が収録されている。

この文書の立場は、冒頭の「従軍記者ニ対スル希望」に端的にあらわれている。「党軍政権」の「壊滅」を目指す「意義深い大会戦」にあたって、「戦争ノ目的ヲ遺憾ナク發揮スルノニハ諸君ノ報道ノ力ニ由ルコトガ極メテ大デアル」と記者たちを鼓舞する字句は、単なるリップ・サービスではない。以下の文面を参照されたい。

……皇軍勇戦奮闘ノ状況方逐一迅速ニ報道セラレ国民並軍隊ノ志気ヲ弥ガ上ニ昂揚シ戦勝ノ余威ヲ敵国及第三国ニ反映セシムルコトハ従軍記者諸君ノ双肩ニ掛ル重大使命デアル、諸君ハ直接銃ヲ執テ戦場ニ立テル将兵ト齊シク国防第一線ニ立チ国策具現ノ陣頭ニ立ツ勇士デアル 諸君ノ一言一句ガ国民ハ勿論敵国否全世界ニ及ス影響ノ甚大ナルニ鑑ミ大局の見地ヨリ報道報国ノ道ヲ竭サレンコトヲ切望スルト共ニ櫛風沐雨不眠不休ノ努力ニ対シ最大ノ敬意ヲ捧グル
次第デアル（傍線は引用者）

「漢口攻略ノ歴史的報道戦線」に立つ記者たちは、「直接銃ヲ執テ戰場ニ立テル将兵」と同じ「国策具現ノ陣頭ニ立ツ勇士」だという最上級の評価を含んだ呼びかけは、「諸君ノ一言一句ガ国民ハ勿論敵国否全世界ニ及ス影響」がきわめて大きい、との認識にもとづくものである。八項目に及ぶ記者たちへの具体的な要望の中にも、「機秘密ノ保持ヲ嚴守スルコト」とあわせて、「皇軍ノ正義ヲ尚ビ軍紀ノ嚴正ナルコト、無辜ノ民ヲ愛護シ秋毫モ犯スコトナキコト、外国ノ權益ヲ尊重シ列國ト協調ヲ失ハザルコト等ハ対外的ニ大ナル影響アルヲ以テ此種ノ報道ヲ重視スルコト」という一節が読まれる。つまり、この『葉』の書き手は、従軍記者たちの記事が翻訳され、「敵国」「全世界」に伝えられ、「対外的ニ大ナル影響」をもたらす可能性を想定しているのだ。そのうえで『葉』は、内務省警保局『出版警察報』にも掲げられた検閲コードの一部を開示しながら（第四―第六節）、軍に従軍記者たちを包摂し、一体化させようとしている。「報道報国」とは、そうした姿勢を象徴的に表現した標語に他なるまい。

そして、この『葉』が書かれる直前で、従軍記者の資格で取材・執筆した日本語のテキストが「敵国」で翻訳され、「全世界」に「大ナル影響」を及ぼす恐れがあった事例と言えば、石川達三『生きてゐる兵隊』以外にはない。すでに知られる通り、『生きてゐる兵隊』の掲載誌『中央公論』一九三八年三月号は発売禁止となったが、そのうち「差押を免れたる一部」のものが支那側の入手するところとなり、上海に拠点を置くアメリカ系資本の中国語紙『大美晩報』紙上で抄訳され、「反日、抗日の宣伝に使用」されたのである（内務省警保局『出版警察報』第一一二号、一九三八年四月―六月分¹⁾）。当然ながらこの事実は、例えば「奇怪！ 支那紙に『未死的兵』／発禁小説を故意に翻訳して逆宣伝」（『都新聞』一九三八・三・二九）等の記事で、日本語でも報じられていた。こうした状況に対抗し、芥川賞受賞直後の玉井勝則伍長・火野葦平を中支軍報道部に抜擢、徐州作戦に従軍させたのが、「附録」の講演者であり、この分野のエキスパートとして中支軍の「報道・宣伝活動を実質的に指導」していた人物、馬淵逸雄である¹²⁾。

ところで、〈従軍ペン部隊〉の創設経緯をめぐっては、当時陸軍省新聞班のメンバーだった松村秀逸陸軍中佐による発言

がある。九月三日、東京日日・大阪毎日新聞社が主催した日比谷公会堂での「従軍文壇人壮行講演会」の席上で陸軍を代表して「激励の辞」を述べた松村は、〈従軍ペン部隊〉のアイデアは「昨夏七月頃か八月頃の中央公論か改造」の林房雄の記事中に、文士の戦地派遣という提言を見つけたので、自分が各方面に「進言」してきたことが「導火線」となった、と述べている（「世界の作家たれ 戦線と銃後を結ぶ筆の力」『東京日日新聞』一九三八・九・六）。ここで松村が言及したのは、内容から判断して、『改造』一九三八年六月号に林が寄せた「国策と文学」であろう。林房雄当人も、「漢口従軍のことは半年ほど前に、僕が陸軍軍人の前で発言したことが動機になったと伝えられている」と、自らが発案者と認めるような一文を残している（「内輪話」『文学界』一九三八・一一）。だが、いつもの彼に似合わずいまひとつ歯切れが悪いのは（しかも松村と林の発言は微妙に食い違っている）、単に彼が〈従軍ペン部隊〉の選に漏れたからではなく、似たような発想がすでにあちこちで語られていたからだろう。詳しくは後に触れるが、林が『改造』に書いた同月号の『新潮』で岡田三郎は、いちはやく〈大日本陸軍従軍画家協会〉を結成した美術サイドの動向を例示しつつ、「軍方面と協力して行う」「団体的行動」を提案している（「文芸時評」『新潮』一九三八・六）。中国で火野と親交を深めていた小林秀雄は、「僕が若し役人なら日支事変報告製作の為に一流文学者を総動員する」「観察にも文章にも熟達した一流文学者を続々とただぶらりと支那にやってみるがよい」と書いてしまっている（「支那より還りて」『東京朝日新聞』一九三八・五・一八〜二〇）。結果的に選ばれた〈従軍ペン部隊〉のメンバーが「一流文学者」だったか否かは大いに議論の余地があるが、威勢のよい掛け声だけにとどまらず、すでに動き始めていた書き手たちもいた。尾崎士郎は、通俗大衆作家たちが軍部と協力するための会合や、榊山潤を中心とする文士派遣のプランがあったことを伝えている（「漢口へ行く前の感想」『新潮』一九三八・一〇）。菊池寛も、〈従軍ペン部隊〉人選に当たって、「他の計画から合流した人が二、三人ある」と言うのだから（「話の屑籠」『文藝春秋』一九三八・一〇）、むしろ文学者の側が積極的に自分たちを売り込んでいた、とも見える。

以上の文脈を踏まえると、社会現象とも言えるブームを巻き起こした火野葦平『麦と兵隊』（『改造』一九三八・八）が、

戦争遂行権力と文学の書き手それぞれにどんなインパクトをもたらしていたかも了知されよう。ひとまず前者について言えば、武漢作戦の時点で火野葦平と『麦と兵隊』は、中支軍報道部がプロデュースした最大のスターであり、ヒット商品であった。『紙弾』（一九四三）は、中支軍報道部の後身である支那派遣軍報道部が活動の事績をまとめた部内の記念誌だが、その中には、武漢作戦当時の佐藤賢了陸軍省新聞班長（兼大本営陸軍部報道部長）が、大々的な報道キャンペーンを行うために各方面と協議を重ねており、中支軍からは馬淵逸雄が現地案を携えて打ち合わせに臨んだ旨の証言がある（岩崎春茂「武漢作戦の報道」）。実際に、武漢作戦全体の宣伝方針に中支軍の経験やノウハウが重視されたことは、内閣情報部のまとめた「漢口作戦二件と政府ノ行フベキ宣伝方策」（一九三八年八月二十九日付）が、構成・内容ともに先掲の中支軍による計画を踏まえていることから明らかである。馬淵は、著書『報道戦線』（改造社、一九四一）で、軍のスポークス・パースンの立場から、「武漢作戦の記録を国民的記録として後世に伝えんがため」日本国内の「凡ゆる文化陣」の動員を企てたと回顧しているが、武漢作戦当時、『麦と兵隊』が、軍の庇護下で文学言説の書き手を従軍させ、テクストを生産させた貴重な実績であり、成果と見なされていたことは確かだろう。

大本営が陸海軍に武漢攻略を下命したのが八月二二日、その日の夕方には菊池寛に連絡が入り、翌二三日午後には、内閣情報部と二二名の文学者との会合がセッティングされた（「文壇人起つ 銃後文芸指導」〔東京日日新聞〕一九三八・八・二三）。戦争遂行権力にとって、文学者・文化人を活用した宣伝は、間違いなく作戦行動の一翼を担うものだったのである。だが、それはいったいどういうことなのか。

3 思想戦と文学者

では、この時点で軍や情報当局は文学者・文化人に何を期待し、どんな役割を配分しようとしていたのか。（従軍ペン部

隊)に手向けられた激励の言葉のいくつかを参照してみよう。

陸軍省新聞班の鈴木庫三は、「一流の文士諸君」による「報国」の意志を嘉しながら、「従軍したからとて、直にその役目を済まなかつたら済まなくとも吾等は敢て催促がましいことを言わないつもりだ」「従軍の意義は文士諸君の作の何処かに現れて将来の人間陶冶に資するに相違ない」とコメントしている(「漢口従軍を前にして 従軍文士に期待」『東京朝日新聞』一九三八・九・三三)。内閣情報部書記官の川面隆三も、長期戦に入りつつある重大時期に文学者に現地を視察してもらって、「民心の高揚と正しい思潮を培かう為に尽くしてもらおうつもり」だが、「何も行って来たからといって直ぐどうしてくれのこんな物を書いてくれのと注文などはしません」「何十年か先に文学上の効果が現われるのでもいい」と述べている(「漢口戦線へ筆の進撃 菊池、久米、吉屋氏等先ず決定」『都新聞』一九三八・八・二四)。何とも気の長い話だが、具体的な要望を述べたものもある。先にも紹介した松村秀逸は「銃後と戦線」が「がちりとスクラムを組んで」進むためにも、従軍文士には「ペン力で楔となっていたきたい」「銃後と戦線をかたく縛りつける紐となり帯となつてほしい」と発言(前出「世界の作家たれ 戦線と銃後を結ぶ筆の力」、海軍省軍事普及部の松島慶三は、「今まで概ね国民の視野の外で活動している関係者、多数の無名戦士の働きが伝わりきらぬところが多くある」から、海上制圧の意義や江上部隊の苦しみ、陸戦隊や航空部隊の武勲の蔭の努力などを誤りなく伝えて欲しい、とする(「百万大軍の支援 天地に文化の曉鐘を鳴らせ」『東京日日新聞』一九三八・九・六)。類似の文言は(「従軍ペン部隊」メンバーの複数人が書き留めているので、軍・情報当局側から繰り返し強調されていたと推測できる。

だが、これらの発言は、どこかで見覚えのある話ではないか。わたしが想起するのは、火野葦平による『麦と兵隊』(「前書」と、中支軍の高橋少佐によるいくつかの発言である。そこで火野は「此の壮なる戦争の想念の中で、なんにもわからず、盲目のごとくになり、例えば私がこれを文学として取り上げる時期が来ましたとしても、それは廻か先の時間のこと」で、「戦争について語るべき真実の言葉を見出すということは、私の一生の仕事とすべき価値のあることだと信じ」て

いる、と書いていた。しかし高橋は、単行本巻末の「『麦と兵隊』所感」の中で、その言葉を打ち消すように、自分は「玉井を連れてゆく時には別に何にも註文はしなかった」にもかかわらず、やむにやまれぬ思いに突き動かされて彼が書いた『麦と兵隊』は「純乎たる戦争文学」となった、と言挙げしている。ちなみにこの高橋少佐は『麦と兵隊』五月一八日条で、記者発表をしながら、新聞報道でニュースにならない戦闘にかかわる「惨憺たる苦勞」「言語に絶する犠牲」にも注目せよ、と語っていた人物でもある。松本和也は、その場面を「(戦場)の描き方／読み方」にかんする「読解のコード(読み方のレッスン)」を自己言及的に語ったものと看破したが、一方でそれは、軍の報道担当官の立場として、どんな内容の情報も欠けているかという認識を物語ったものでもあつたろう。

おそらく陸海軍と情報当局は、企画趣旨にかんして、『麦と兵隊』の線でも事前調整を行っていたと見て間違いない。対象・地域・主題について特に指定はしないし、文学的成果を早急に求めることもないというコンセプトは、決して書くこととの自由を意味しないにしても、『生きてゐる兵隊』事件の記憶も生々しいこの時点で、文学者たちの警戒心を和らげる格好の誘い水となったことは疑えない。

しかも、情勢を見れば、別に注文をつけなくても(従軍ペン部隊)参加者たちが何かを書くだろうことは明らかだった。久米正雄が学芸部長を務めていた『東京日日新聞』は、『大阪毎日新聞』とともに陸軍班の一〇名・海軍班の七名と契約、「現地ルポルタージュの執筆通信」を掲載すると告知している(「十七氏本紙に執筆 文壇部隊従軍報告」一九三八・九・一六)。「読売新聞」は、川口松太郎・丹羽文雄・尾崎士郎・片岡鉄兵・佐藤春夫・白井喬二が「現地からの生々しい便り」を寄稿すると宣伝している(「颯爽・ペン部隊出陣」一九三八・九・一二)。林芙美子と東西の朝日新聞社との関係はつとに佐藤卓己が論じた通りである。従軍作家二二名の壮行会は中央公論、改造、日本評論、新潮、主婦之友、講談社、松竹、東宝、新興キネマといったメディア企業の共催として行われ、「まるで作家が主催者から押しつぶされそう」という観察さえ披瀝されていた(「華々しき宴?」「都新聞」一九三八・九・三)。陸海両班の出発時には松竹、東宝、日活の俳優陣が顔

を揃えたので、映画会社とも何らかの契約があるに違いないと勘繰られてもいた。つまり、〈従軍ペン部隊〉自体、はじめから大がかりなメディア・イベントとなるよう構想されていたのである。武漢作戦の本格化を前に競争を過熱させていたメディア企業が、この計画に飛びつくことは火を見るより明らかだった。一九三八年の戦争遂行権力は、こうした競争を通じて国内のメディアを統御するすべを、すでに自家薬籠中のものとしていたのである。

では、道義的にも契約的にも書くことの責務を負うことになってしまった〈従軍ペン部隊〉参加者たちに、どんな選択肢があったのか。そこで注目したいのが、先に挙げた陸海軍の代表者の発言である。松村秀逸は、「ペンの力」で前線と銃後の「楔」となれと言った。この場合の「楔」とは「二つの物事を強く結ぶもの」とえである（『明鏡国語辞典』三省堂）。しかも、この比喩は、いわゆる従軍記者たちとの役割分担を示唆するものでもある。前節で触れたように、『従軍記者ノ葉』は、戦線の報道記者たちを軍と一体的な存在と位置づけていた。それに対し海軍の松島慶三が、『麦と兵隊』の言葉を口移しにするように、「国民の視野の外で活動している関係者、多数の無名戦士の働き」を可視化してほしい、と語っていたことを思い出そう。第一線の攻防に集中しがちで、基本的には速報性を重視する報道記者たちがフォローしきれない後方部隊の活動や過去の軍功の顕彰、占領地での宣撫活動の苦勞、新しい「東亜」の「建設」に向けた課題と覚悟とを言語化し、各種メディアに掲げること。佐官待遇の軍属として戦地に向かうことになった〈従軍ペン部隊〉のメンバーが、現地に着後、戦跡めぐりにかなりの時日を費やしたのは、ゆえないことではない。〈従軍ペン部隊〉参加者の思いはどうか、彼女ら彼らにまず求められたのは、前線と銃後との物理的な距離を心理的な距離としないための言葉であり、現地軍の多面的な活動に人格を与えて〈顔が見える〉ものとし、銃後の読者の〈理解〉を深めることだった。言い換えれば、帝国の版図を超えて畸形的に膨張してしまった日本社会を、前線・ロジステイクス・銃後の三者を包含するかたちで、切れ目なく再統合する物語なりキャラクターなりキーワードなりを生産することが期待されていたのだ。おそらく、戦場での日常性にスポットを当てた『麦と兵隊』や、銃後の弟に宛てた書簡という体裁をとった『土と兵隊』『文藝春秋』一九

三八・一一）は、まさにそのような狙いを実践したテクストと意識されたことは間違いない。

加えて、こうした発想が、内閣情報部が議論していた思想戦の方向性にも整合的だったことにも留意したい。この時期の思想戦の基本的発想を知るには、前出の中支軍による対敵宣伝戦略を反転させてみればよい。内閣情報部の前身である内閣情報委員会の部内資料『時局宣伝資料 国防と思想戦』（一九三七・八・一五）には、「国家総動員」で戦われた第一次世界大戦では、「国家の結合を破壊し、思想的に敵国を崩壊に導く」思想戦の地位が高まったことや、連合国が宣伝と経済的圧迫をもってドイツを「内部より崩壊せしめ、以て戦意を放棄するに至らしめた」という認識が語られている。とくに第一次大戦の〈教訓〉として、軍事的には優勢だったドイツが宣伝戦への備えを怠り、国内に厭戦機運の蔓延を許した結果、敗北につながったという議論は、軍・情報当局の共通理解となっていた。そのため、思想戦の目標は、何よりも「国民の不安」「民心の動揺」を抑え、「国民が戦争の汎ゆる苦痛と不安とを克服し」「戦捷に向って一路邁進する鞏固なる国民の精神的団結」を維持し続けることに置かれるとされるだろう。事実、中園裕によれば、日中戦争期の「検閲標準」では、对中国政策にかかわる政府部内の混乱や対立、政府に対する国民の不信をうかがわせる記事を極力排除する方針が立てられていた。¹⁶戦争遂行権力にとつての思想戦のコンセプトは、基本的に国内の秩序維持を最優先させる「思想国防」、つまり「防衛的国内思想戦」だったのである。¹⁷当時の内閣情報部長・横溝光暉は、〈従軍ペン部隊〉企画は陸海軍側から持ちあがり、内閣情報部が「斡旋役」を務めた、と言う（漢口へ、漢口へ 剣はペンと同じ鉄から成る）『東京日日新聞』一九三八・九・一六）。各省庁の情報部局の連絡調整役として当然の職務ともいえるが、山下聖美は、日本大学芸術学部図書館蔵「文壇人従軍関係費受領証」という資料から、九月六日に行われた首相官邸午餐会の際、〈従軍ペン部隊〉メンバーに各七〇〇円の支度金が支払われたこと、その予算の醸出先が内務省・陸軍省・海軍省・内閣情報部の四者だったことを明らかにした。¹⁸内閣情報部や内務省が主体的に参与する理由は大いにあったということだろう。

付言すれば、思想戦を構想した側の人々にとって、文学者はなかなか厄介な存在だったのである。石川達三の事件だけ

ではない。上海で石川のテクストの抄訳が掲載されていた最中に、元日本プロレタリア作家同盟書記長の鹿地亘が、国民政府軍事委員会政治部の招請で武昌に到着していた。¹⁹ 鹿地は、当時のパートナーだった池田幸子とともに、政治部内に設けられた設計委員会委員に就任、漢口で開かれた「抗敵文芸家協会発会典礼」に日本人反戦作家として参加する他、国民政府部内で「文化領域の戦時動員機構」とされた政治部第三庁（郭沫若庁長）に所属、一九三八年七月に広州で発行された夏衍による『生きてゐる兵隊』中国語訳『未死的兵』に、ファシズム批判の立場から序文を寄せている。²⁰ 興味深いことに、こうした鹿地の動向は、日本語の国内メディアにも逐一報じられていた（例えば、「漢口に邦人二名 作家鹿地亘と内妻 抗敵文芸会で演説」〔『都新聞』一九三八・三・三〇〕、「祖国に弓引く鹿地」〔『東京朝日新聞』一九三八・四・六〕、「抗日支那に躍る国賊！鹿地亘夫妻 八ツ裂きなお足りぬ 売国演説と論文」〔『読売新聞』一九三八・四・二三〕など）。また、鹿地のかつての同志・山田清三郎は、転向以後の鹿地をモデルにした小説「嵐の蔭」〔『文学界』一九三八・一二〕を発表しているが、もはや死をもって償う以外に祖国へ甦る道はないと訴える山田は、鹿地の上海脱出の経緯や国民政府での活動をかなり正確にフォローしており、何らかの情報ルートがあったことをうかがわせる。

米谷匡史は、「一九三〇年代半ばの上海には、「帝国」のメディアがその外部に通じる境界領域があったのであり、日・中文学者の文化運動が双方向的に連携していくようなネットワークが生まれつつあった」と論じている。²¹ それを「運動」と呼べるほど持続的で組織的な動きがあったか否かは留保が必要だとわたしは思うが、いずれにせよ大事なことは、何らかの形で〈移動〉と〈翻訳〉の窓は開かれていた、ということだ。実際に鹿地亘や青山和夫は、当時の中国では日本語のラジオ放送や総合雑誌などを資料に日本の戦力や国情の分析を行っていた、と証言している。²² 日本の戦争遂行権力が言説の翻訳可能性を前提に行動していたことは先に述べた通りである。当たり前だが、書物というモノや、発信される電波によって流通する言説の受容圏は、現実の国境と同じではない。メディア空間は本質的に多孔的なので、いかなる権力も情報拡散と流入を完全にコントロールすることは不可能である。重慶の政府も東京の政府も、お互いが相手のことを注意

深く観察しあっていることは百も承知だったのである。

そこから推せば、武漢作戦への石川達三の再従軍も、単なる温情的措置ではないことも理解されよう。中央公論社から再び声をかけられた石川にとっては、「前の失敗をとりかえし過ちを償う意味」を持っていたのかも知れない（石川達三『結婚の生態』新潮社、一九三八）。のちに石川は、この件について「裁判中の人間は、外国旅行を許さないのが当然」だが、「私が二度目の従軍を願い出ると、陸軍報道部では文句なしに許可してくれた」「それを裁判所に言うと、『正式にはダメだが、軍が許可しているなら大目に見ましよう』と認められた」と語っている²³。だが、それは別に、日本の戦争遂行権力の寛容さやいい加減さを意味していない。軍や情報当局にとって、再び『中央公論』で石川に戦争を書かせることは、とくに中国側に向けて、石川が反戦作家ではまったくないことをアピールするまたとない機会だったと考える方がはるかに合理的である。『報道戦線』の馬淵逸雄は、『生きてゐる兵隊』で、「残忍な場面が当局の忌諱に触れた」石川達三が、『武漢作戦』（『中央公論』一九三九・一）で「見事に名誉を恢復した」と書いた。このことは、戦闘に参加した将兵の内面ではなく、戦略・政略の全体性を描くことを志向した石川の二つ目の従軍テキストが、彼らのもくろみを十分に満足させるものだったことを証し立てている。

4 〈従軍ペン部隊〉の歴史的意義

戦争遂行権力にとって〈従軍ペン部隊〉計画は、『麦と兵隊』の成功をモデルとしながら、『生きてゐる兵隊』事件が露呈させてしまった文学テキストの秩序攪乱的な可能性を懐柔し、馴致しようとする試みと位置づけることができる。そこで文学者は、前線部隊に追随するジャーナリストたちとは異なる役割とフィールドとを割り当てられた。具体的には、速報主義に傾斜したメディア企業の論理に束縛されがちな報道記者たちがカバーしきれない戦場の多面性・多元性を、ニュー

スとは質の異なる言葉として言説の場に登録していくことが求められたのである。さらに陸軍は、武漢作戦と並行して実施されることが決まった広東攻略戦に、〈従軍ペン部隊〉メンバーへの応接を終えた火野葦平を送り込む。火野の回想によれば、軍命で書きはじめ、久米正雄によって『海と兵隊』と名付けられてしまった従軍記は、明らかに『麦と兵隊』のスタイルを踏襲した日録体のテクストであった。²⁴

では、肝心の文学者たちは、〈従軍ペン部隊〉構想をどう受け止めたのか。ちなみに、発案者側のキーワードだった思想戦という語は、一般に知られていない言葉ではなかった。標題にその語を含む書籍も何点か公刊されていたし、ジャーナリストの伊佐秀雄は、新聞を「最も有効なる思想戦の武器」にすべきと主張する論説で、軍や情報当局と同様の宣伝観を書きつけている（『戦争、宣伝、新聞』『日本学芸新聞』一九三八・九・一）。だが、自己の著作が「対内宣伝」であることに自覚的ではあった火野葦平は別として（『石川達三・火野葦平対談』『中央公論』一九三九・一二）、管見の限り、文学者たちが〈従軍ペン部隊〉企画と思想戦の論理とを結びつけて考えていた形跡は見られない。

とはいえ、どうやらそれは意図的なずらしとは言えないようにわたしは思う。というのも、〈従軍ペン部隊〉計画をめぐる文学者たちの反応は、〈何をするのか〉ではなく、〈誰が行くのか〉という点に集中したからである。『都新聞』の取材に応じた菊池寛は、「始め四五人だと思っただから私の極く親しい知人だけに頼んで行って貰う積りでいた」のだが、「廿人まで行けるということになったんで、慌てて文壇総動員の形で五十通ばかり勧誘状を出した」と語った（〈ペン部隊顔触れ決る廿二名 面会謝絶で出陣準備〉一九三八・八・二七。ただし、菊池は別のところでは「四十人ばかりに通知を出した」とも言っている（『負傷兵の血』『東京日日新聞』一九三八・九・六）。新聞報道ベースからその後の経緯を確認すると、従軍希望の返信が届いた三五名をリスト化し、二五日午後五時に内閣情報部に提出、二六日午前一〇時からの内閣情報部と陸海軍関係官による会議の席上で、二二名のメンバーが決定された。だから、広津和郎に宛てて「僕は行きたいという希望を答えて置いたが、君も是非行け」と手紙を書いた宇野浩二や、勧誘状を見て「全く思いがけない幸運」に「胸が躍っ

た」という広津和郎のように、従軍希望の返事を出しながら「糠喜び」に終わったという書き手が続出した（広津和郎「漢口行きの人選 残念だが止むを得ぬ」『都新聞』一九三八・八・二九）。萩原朔太郎のように「返事を一日送らせてお陰で人選からオミットされた」と嘆く者もいた（「文士の従軍行」『東京朝日新聞』一九三八・九・三三）。あまりの反響の大きさに、陸軍部内では、選に漏れた「一流文壇人」のうち、里見弴・宇野浩二・広津和郎・川端康成・阿部知二・山中峯太郎の六名を派遣する検討を始めたと報じられたり（「文士部隊に第二次動員令」『都新聞』一九三八・九・一）、長谷川伸や甲賀三郎らが「ペン部隊第二陣出陣に備えて、文士健脚部隊」を結成し、訓練と称して奥多摩で登山するメディア向けのパフォーマンスを披露したり、というおまけもついた（「ペン部隊の第二陣が従軍前に「足」の猛訓練」『都新聞』一九三八・九・三）。

かような状況だったわけなので、「内閣情報部及び陸海軍当局の計画は全文壇人をこぞって感激の嵐に巻きこみ従軍を願うものが殺到した」という観測は、戦争報道ならではの大仰な誇張とは言いきれない面がある（従軍作家廿二氏決る 来月中旬、勇躍戦地へ）『読売新聞』一九三八・八・二七）。もちろん、ことの性質に鑑みれば、この企画への反対や躊躇は沈黙の形で表明する他なかっただろうことは、割り引いて考えるべきである。また、武漢作戦には、画家、音楽家、映画人、写真家など多くの芸術関係者が従軍していることもよく知られる通りである。しかし、その中でも文学者グループの積極性とメディアへの露出の量は際立っている。

何とも暗澹たる気分させられるこうした事態を前に、ひとは、それが文学者の性なのだと思いをすくめてみせることもできる。あるいは、小谷野敦が言うように、日清戦争にも日露戦争にも文学者は従軍していたし、この時期のほとんどの文学者は「戦意高揚もの」に手を染めなければ「生計が成り立たなかつた」のも事実だろう。だが、そうした一般的な説明に還元するだけでは、この一連の出来事の持つ歴史的な意義の検証が不十分なままになりかねない。わたしの立場から見て重要なことは、主に文学専門雑誌において、大衆文学作家の（従軍ペン部隊）入りを疑問視する声が拡がりを見せて

いたことである。

またもやその対立か、と思わなくもない。しかし、『文芸』の匿名時評は、人選をめぐって「マダム・コレットとマドリッドとの関係よりは、アンドレ・マルロオとマドリッドとの関係の方が」文学的必然性があるのではないかと婉曲的ながら疑問を呈していたし（『五行言』『文芸』一九三八・一〇）、〈従軍ペン部隊〉メンバーの帰国後に書かれた『新潮』の時論は、「営利的な大衆向の出版界で成功している文士を多く選んだことは失敗であり、もっと実質的な効果を挙げ得る若い作家を送るべきであったと云うことは、一般の批評をまつまでもなく明らか」だ、と断言していた（『新潮評論 時局・芸術・文学』『新潮』一九三八・一二）。また、陸軍省新聞班による第二次戦地派遣のメンバーにも擬せられていた川端康成は、より端的に、次のように記している。

礼を失する引例ながら、多数の大衆文学者が漢口攻略戦に従軍している。その人達が現地に行つて戦争を、いわゆる「大衆文学」の眼で見るであろうか。いわゆる「純文学」の眼で見るであろうか。

その人が文学者であるならば、無論「純文学」の眼、文学の眼で見るにちがいない。戦場で文学どころかと言うところこそ、文学者としては、遊びの心である。火野葦平氏の「麦と兵隊」や上田広氏の「黄塵」（大陸）など、出征兵士の陣中作品にも明らかな通り、水火のなかでも、文学の心は失おうとして失えないのである。感動を先ず純潔にとらえることが、文学の第一歩である（『文学の第一歩』『東京朝日新聞』一九三八・九・三〇）。

ここで大事なことは、〈従軍ペン部隊〉の誰が「純文学」者で誰が「大衆文学」者かを名指すことではない。片岡鉄兵には自分が後ろ指をさされているという自覚があったようだが（『戦地へ行く』『文芸』一九三八・一〇）、それを言い始めると、そもそも久米正雄や菊池寛はどうなのか、という話になる。川端の論のポイントは、戦場を観察する文学者の眼は必

然的に「純文学」のそれになるという点にある。そして、その根拠として持ち出されるのが、火野葦平や上田広のテクストなのである。

だが、こうした見解は川端独自のものではない。とりわけ『麦と兵隊』は、ルポルタージュ・報告文学として高く評価されていく一方で、文学者によって観察され、体験された記録だから価値がある、という議論が頻出する。この傾向は、より直接的に火野の戦場体験を記述したと見なされた『土と兵隊』以降、さらに昂進していく。板垣直子は、『麦と兵隊』『土と兵隊』二作を「武漢三鎮占領」のニュースと並置しつつ、「純文学系統の偉大な二つの戦争文学をえたことも、国の大きな喜びでなければならぬ」と書いている（『戦争の真実』『都新聞』一九三八・一一・二）。伊藤整は、「記録的な手紙の集まりに外ならない』『土と兵隊』の美しく強烈な印象は、実戦を戦う兵士たちの「珠玉の体験」が、「文学の眼と文学の表現」を持つひとによって適切な表現を与えられたからであり、「戦争の実体を確実にとらえて我々の前まで持って来て呉れているのは、文学の眼であり、文学の言葉」であると興奮気味に語っている（『文学の持つ力』『信濃毎日新聞』一九三八・一一・三）。ここで伊藤の言う「文学」が即ち「純文学」を意味することは、誰の目にも明らかだろう。中谷いずみは、先掲の川端の時評にも触れながら、「従来の文壇」からすれば周縁的な書き手が、文学の側に条件付きで包摂されていく事例として、『麦と兵隊』を挙げている²⁶。しかし、こと火野葦平と彼のテクストについて言うなら、戦場の言語表現にかかわるヘゲモニー抗争の中で、「純文学」の権威と正統性を担保するアリバイとして使われた、と見た方が適切だとわたしは思う。ここでも「火野葦平」は、語る立場の都合で使われてしまったのだ。

しかも注意すべきは、こうした言葉を語ったり書いたりする者が、おそらく無自覚のうちに、「純文学」の概念に質的な変化を持ち込んでしまっていることである。森山啓は、『麦と兵隊』は「純文学」というあまり大衆に馴染まれていないスタイルで書かれたものであるにもかかわらず、「日本の極平凡な質実な国民（わけて農民達）の誰でもが持つような魂」と矛盾しない「魂の率直さ」によって、「大多数の国民の気質に適合した」と書いた（『土と兵隊』と純文学）『国民新聞』

一九三八・一〇・三〇)。前掲の『新潮』巻頭評論には、火野葦平の成功によって、「人の心の深みに働きかける点では、云うまでもなく文芸が最も適している」ことが証明された、という一節がある（『新潮評論 時局・芸術・文学』）。『名作鑑賞 陣中文学』（前進社、一九四〇）の編者兼解説者である和田國雄は、先に見た伊藤整の議論を「もし戦闘の真只中の行為を表現する為に人が低俗な文章の表現法しか知らなかったとするならば、精神の最高潮の機会は、死滅した言葉の骸」しか生み出せない、「戦争は純文学の厳しさを社会人の真剣さに結びつける又とない機会」となって、ひとびとに「純文学の意義と必要性を理解させた」とリライトしている。まるで、「純文学」しか戦場の真実は描けない、とでも言うかのようだ。

これらの発言には、「純文学」をめぐる無視できない態度の変更が刻まれているとわたしは思う。日本語の文学言説の歴史を調べたことがある者なら誰もが知っているように、一九二〇年代から一九三〇年代にかけて、「純文学」という領域は、商業ジャーナリズムとの関係や対象読者の学校歴・文化資本の差異において意識され、上書きされてきたはずである。だが、ここでは、「純文学」の価値が、ある種の有用性の側に求められてしまっている。確かに、とりわけ横光利一の『純粋小説論』以後、「純文学」は以前にもまして「社会」という表象を欲望し、自分たちの言葉と「社会」との関係を整整することに腐心していたのだから、当事者たちにとっては、そのような意味での有用性を主張したつもりだったのかも知れない。しかし、こうした発言が、戦争遂行権力にとつての「純文学」の有用性を訴求していることは明白である。

べつにわたしは、「純文学」は無用の用に徹するべきだ、と言いたいわけではない。純粋な芸術性を擁護する立場からの墮落を指弾したいわけでもない。言葉による戦場の表現にかかわって、魂だとか心だとか、眼であるとか態度であるとか、およそ合理的な指標にはなり得ない曖昧な語を規準としながら、「純文学」の価値を担保しようとする言説が、それ以前の段階で排除と選別のために活用していた概念をいつのまにかすり替え、それまで自分たちが遠ざけていた種類の語彙を持ち出していることが問題だと思ふのだ。しかも、「純文学」の有用性を主張する立場は、自分たちの「技能」に対する根柢

のない自信と自意識をいたずらにふくらませながら、単に戦場表現にとどまらない拡がりとも一般性を身にまとうとするだろう。前半でも紹介した、文学者の戦地派遣を主張した岡田三郎の文章には、以下のような一節が読まれる。

いまの現実には、国策の線に沿うところの、最も積極的にして有効な文学運動は、といって間違ひならば、文学者の運動は、といひなおしても、宜しい、それは何かいうならば、国策遂行のための一助たる、対外宣伝、及び宣撫工作のための、宣伝文学を書くことである。文学と名のつけられるような種類のものでもなくとも結構、ともかく、習い覚えた文学を、直接、国策遂行のために役立てることである。(『文芸時評』『新潮』一九三八・六)。

この岡田のコメントが重要なのは、単に一九四一年一二月以降の「文士徴用」の論理を先取りしているという理由だけではない。文学、それも「純文学」に携わる者たちが、誰よりも言語のことを知悉し、言語の加工と操作に長けているという無根拠な自負に貫かれているからである。だが、文学者にとつて言葉とは、そんなに簡単に「役立て」られるようなものなのだろうか。確かに文学者は言葉とかかわり続ける仕事だが、同時に、言葉に突き放される経験を他の誰よりも積み重ね、言葉の手に負えなさを他の誰よりもよく知る存在ではなかったのか。つい一〇年ほど前に盛んに論議されていた、岡田も親しく見聞きしていたはずの前衛的な言語実験の記憶は、いったいどこに行つてしまつたのか。

最後に、ここまでの議論を踏まえて、〈従軍ペン部隊〉の歴史的意義について、とりあえずのまとめをしておこう。

まず第一に指摘すべきは、海軍が対内宣伝に本格的に乗り出す契機となつたことである。日中開戦以後、軍のメディア戦略はもっぱら陸軍によつて主導されていた。しかし、〈従軍ペン部隊〉計画以後、海軍は広東方面に文学者・文化人を次々と送り込み、国内向けのイメージ戦略に本腰を入れていくことになる。

二点目は、第二節・第三節で論じた思想戦のコンセプトとのかかわりである。確かに〈従軍ペン部隊〉計画は、火野葦平に匹敵するスターを生み出すことはなかった。しかし、思想戦の狙いをあくまで国内世論の管理・統制に見るならば、軍や情報当局の目的は一応達せられていたと考えられる。日本軍占領地での「文化工作」の惨めさに多くの紙幅を費やした岸田国士『従軍五十日』（創元社、一九三九）にしても、長期戦に向けた覚悟と新秩序建設の困難に立ち向かうという枠組みから大きく逸脱しているわけではない。少なくとも、一九三八年七月の『麦と兵隊』登場以後、〈従軍ペン部隊〉計画の発表と陸海両班の動向、林芙美子の「漢口一番乗り」、火野葦平『土と兵隊』の発表と朝日・東日紙上での『花と兵隊』『海と兵隊』同時連載、『中央公論』『改造』一九三九年一月号の丹羽文雄、石川達三、立野信之による武漢作戦関連テクストと、中国での戦争を主題とする文学的コンテンツは継続的に供給され続けた。すなわち、文学者たちを包摂し、彼ら彼女らを中心にメディア空間を占拠することで、同時代レベルで文学テクストの遊動的な流通可能性を統御することにはひとまず成功していたのである。この後、〈従軍ペン部隊〉に類する大規模なメディア・イベントが企画されることはなかったが、それは、日本帝国に武漢作戦に匹敵する軍事作戦を展開する余力が失われたからに過ぎない。

では、この一連の計画は、文学者たちに何をもたらしたのか。先にも見たように、文学者たちは思想戦のコンセプトに依拠して動いていたわけではない。自分たちにどんな役割が期待されているかを了解しながら振る舞っていたわけではないのである。だから戦略的な行為が困難だったし、その空隙が、文学者たちのさまざまな希望的観測を生んでしまう余白にもなった。だが一方で、自己を「純文学」の側に同定する者たちが、むしろ自発的に自分たちの「技能」の有用性をアピールしていたことも疑えない。その背景にあるのは、戦時における文学言説内部のヘゲモニーの問題であり、文学言説の場自体の位置性と評価の問題だった。「社会」という亡霊めいた表象にとらわれつづけた「純文学」にとって、戦争遂行権力からの承認は、言説領域自体の意味＝意義の不在という不安を埋め合わせてくれるものと意識された。「ようやく政府も、文芸家の存在を、嘗て示したことの無い程度の関心を以て認識し出したのだ」という上泉秀信（〈ペン部隊に望む〉『東

『京朝日新聞』一九三八・八・二九)を筆頭に、(従軍ペン部隊)計画を、国家による文学の承認と取り違えてしまった論者は少なくなかった。この企画は確かに、ある種の抑圧を解いたのである。

たとえば、当時の農林大臣有馬頼寧の肝煎りで農民文学懇話会が作られる際、(従軍ペン部隊)の活動が意識されたことは明らかである。『東京日日新聞』での第一報は、「内閣情報部が文壇部隊を漢口攻略戦に動員してその成果に大きな期待がかけられている折柄、今度は農林省が農民文学を通じて都会人に農村の役割を理解させ農業政策の遂行に役立てようと農民文学の作家を動員する計画を立てている」というものだった(「文壇部隊の出陣に、土の文学」で呼応)一九三八・九・二〇)。(従軍ペン部隊)メンバーのテキストがひとまず出揃った一九三九年二月には、「武漢攻略を前に内閣情報部の企画により多数文壇人の陸海軍従軍が実現されたのを機縁に文壇の時局的関心は頗る高まり」、農民文学懇話会以外に、文芸興亜会、評論家協会、都会文学懇話会、大陸開拓文藝懇話会、旅行文化懇話会など、実態がよくわからないものも含め「つぎつぎに時局的集団」が作られている、という記事も出ている(「時局と文壇 簇生する集団 その成立の経過と動向」『日本学芸新聞』一九三九・二・一)。文学者と戦争遂行権力の接近は、単なる情勢論的な事態と見るべきではない。これは、文学言説、それも「純文学」を名乗る側の発話の論理が引き寄せた帰結なのである。

〔付記〕 本稿は、NHKスペシャル『従軍作家たちの戦争』(NHK総合テレビ、二〇一三年八月一四日放送)製作協力の際に行った調査にもとづくものである。取材と調査の便宜を図って下さった大妻女子大学図書館の方々に改めて謝意を表したい。また、本稿は科学研究費(若手研究(B)「言説の生」政治——戦時下日本語文学の総合的研究)による成果である。資料の引用にあたっては、適宜通行の表記にあらため、ルビは省略した。

注

(1) 高崎隆治『戦時下文学の周辺』(風媒社、一九八二)、『戦争と戦争文学と』(日本図書センター、一九八六)、櫻本富雄『文化人た

ちの大東亜戦争——PK部隊が行く」(青木書店、一九九三) ほか。

- (2) 荒井とみ代『中国戦線はどう描かれたか 従軍記を読む』(岩波書店、二〇〇七)。
- (3) 田中勳儀「丹羽文雄の従軍——(ペン部隊)から「還らぬ中隊」へ——」(『同志社国文学』四二号、一九九五・一一)。
- (4) 久米依子『少女小説』の生成 ジェンダー・ポリティクスの世紀(青弓社、二〇一三)。
- (5) 飯田祐子「従軍記を読む——林美美子『戦線』『北岸部隊』」(『文学年報2 ポストコロナルの地平』世織書房、二〇〇五)。
- (6) 注(5)、飯田前掲論文。
- (7) 佐藤卓己「林美美子の「報告報国」と朝日新聞の報道戦線」(林美美子『戦線』文庫版解説、中公文庫、二〇〇六)。
- (8) 蒲豊彦「一九三八年の漢口——ペン部隊と宣伝戦」(『言語文化論叢』四、二〇一〇・八)。
- (9) 粟屋健太郎・茶谷誠一編『日中戦争 対中国情報戦資料』第二卷(現代史料出版、二〇〇〇)。同じ資料は、防衛庁防衛研究所 戦史室『戦史叢書 支那事変陸軍作戦(2) 昭和十四年九月まで』(朝雲新聞社、一九七六)にも収録されている。「伊作戦」は武漢作戦のこと。
- (10) 山本武利『ブラック・プロバガンダ 謀略のラジオ』(岩波書店、二〇〇二)。
- (11) 鈴木正夫「『麦と兵隊』と『生きている兵隊』の中国における反響に関する覚え書」(『横浜市立大学論叢 人文科学系列』一九九六・三)を参照。この事件については、五味淵「ペンと兵隊——戦記テクストの情報戦」(第4回日韓国際検閲会議「亀裂・痕跡・錯綜——検閲の拡張と変容——」二〇一二年九月一日、日本大学文理学部)にて報告した。
- (12) 山本武利『朝日新聞の中国侵略』(文藝春秋、二〇一一)。
- (13) 荻野富士夫編『情報局関係極秘資料』第八卷(不二出版、二〇〇三)。
- (14) 松本和也「『戦場』の日記——火野葦平『麦と兵隊』」(『立教大学日本文学』二〇〇七・一一)。
- (15) 注(7)、佐藤前掲論文。
- (16) 中園裕『新聞検閲制度運用論』(清文堂、二〇〇六)。
- (17) 佐藤卓己「総力戦体制と思想戦の言説空間」(山之内靖ほか編『総力戦と現代化』柏書房、一九九五)。
- (18) 山下聖美「林美美子『戦線』とペン部隊——「文壇人従軍関係費受領証」から見えてくるもの」(『日本大学芸術学部紀要』二〇一三・一〇)。

- (19) 以下、中国での鹿地の足跡については、井上桂子『中国で反戦活動をした日本人——鹿地亘の思想と生涯——』（八千代出版、二〇一三）を参照した。
- (20) 注(11)、鈴木前掲論文。
- (21) 米谷匡史「日中戦争期の文化抗争——「帝国」のメディアと文化工作のネットワーク」（山口俊雄編『日本近代文学と戦争「十五年戦争」期の文学を通じて」三弥井書店、二〇一三）。
- (22) 菊池一隆『日本人反戦兵士と日中戦争』（御茶の水書房、二〇〇三）、青山和夫『謀略熟練工』（妙義出版、一九五七）。
- (23) 小倉一彦『石川達三ノート』（秋田書房、一九八五）。
- (24) 火野葦平「解説」（『火野葦平選集』第二卷、東京創元社、一九五八）。なお、『海と兵隊』（『東京日日新聞』一九三八・一二・二〇）（一九三九・二・一五）は、単行本化にあたって『広東進軍抄』と改題された。
- (25) 小谷野敦『久米正雄伝 微苦笑の人』（中央公論新社、二〇一三）。
- (26) 中谷いずみ『その「民衆」とは誰なのか ジェンダー・階級・アイデンティティ』（青弓社、二〇一三）。
- (27) この点については、松本和也「昭和十年前後の私小説言説をめぐって——文学（者）における社会性を視座として——」（『日本近代文学』二〇〇三・五）の議論に示唆を得た。